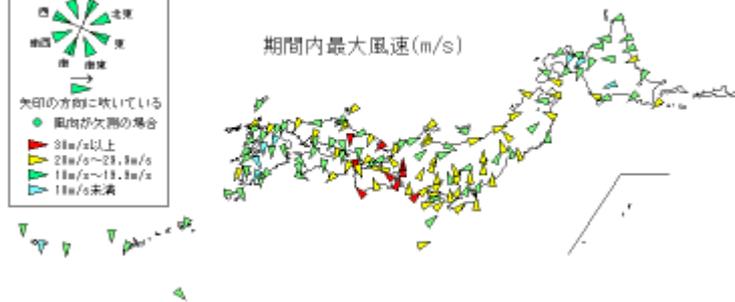
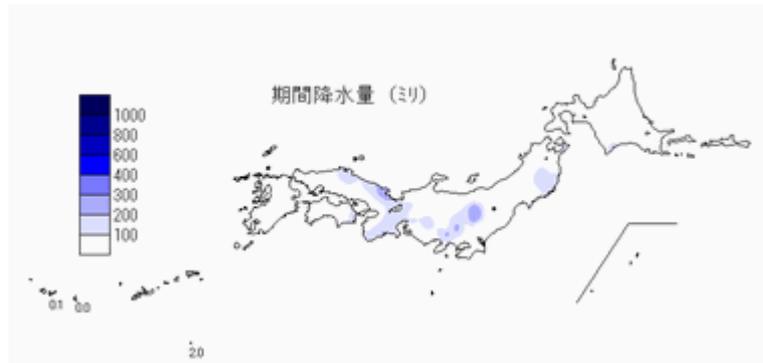
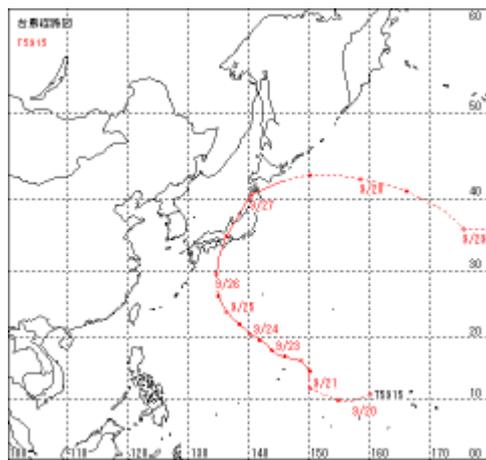


伊勢湾台風

昭和34(1959)年9月26~27日

■気象の概況

9月21日にマリアナ諸島の東海上で発生した台風15号は中心気圧が1日に91ヘクトパスカル下がるなど猛烈に発達し、非常に広い暴風域を伴った。最盛期を過ぎた後も衰えることなく北上し、26日午後6時頃和歌山県・潮岬の西方に上陸した。上陸後6時間余りで本州を縦断、富山市の東から日本海に進み、北陸・東北地方の日本海沿いを北上し、東北地方北部を通って太平洋側に出ている。勢力が強く暴風域も広がったため、広い範囲で強風が吹き、伊良湖（愛知県渥美町）で最大風速が秒速45・4メートル（最大瞬間風速55・3メートル）、名古屋で37・0メートル（同45・7メートル）を観測するなど、九州から北海道にかけてのほぼ全国で20メートルを超える最大風速と30メートルを超える最大瞬間風速を観測した。



■被害の状況

紀伊半島沿岸一帯と伊勢湾沿岸では高潮、強風、河川の氾濫により甚大な被害が発生。特に愛知県では名古屋市や弥富町、知多半島で激しい暴風雨の下、高潮によって短時間のうちに大規模な浸水が起こり、死者・行方不明者が3300人を超す惨事となった。また三重県では桑名市などで同様に高潮の被害を受け、死者・行方不明者が1200人以上となった。台風が通過した奈良県や岐阜県でそれぞれ100人前後の死者・行方不明者が出た。全国の死者・行方不明者数5098人は戦後の水害犠牲者数としては突出している。以降、これほどの水害の惨事は発生しておらず、戦後の防災・治水政策の転換点といえよう。

この伊勢湾台風は「都市型水害」の始まりとされている。梶原健嗣著「都市化と水害の戦後史」（成文堂、2023年）は次のようにまとめている。

伊勢湾台風では名古屋市南区・港区で大きな人的被害に見舞われた。両区ともに人口急増地区であり、背景には近代以降進んだ名古屋市西部の都市化（その背景に名古屋港の築港）そして工業化があった。堀川運河沿いは近代名古屋の中心的工業地帯だったが、戦中期には軍需産業を中心に重化学工業化し、その中で宅地化も進んだ。終戦後、公営住宅という形で整備されたが、多くは木造で脆弱だった。こうして災害ポテンシャルは高いものになっていった。こういう地域に流木が押し寄せた。近代名古屋の発展に木材集積・加工業が果たした役割は大きなものがあるが、その中心地も名古屋港を中心とする南部だった。伊勢湾台風当時には輸入ラワン材が大量に存置されていたが、その木材が高潮による堤防決壊により流出、南部に大木な被害をもたらしたのである。



伊勢湾台風で破壊された堤防（1959年）

この伊勢湾台風によって鳥取県東部の鳥取市と智頭町を流れる千代川の流域では48時間雨量にして207ミリに達する雨に見舞われた。堤防の決壊が随所で起き、戦後最大の洪水被害が発生した。鳥取市では死者2人、負傷者2人、流出全半壊73棟、床上・床下浸水5432棟、田畑の浸水4014町（約3980ヘクタール）の被害が出た。



鳥取市立町二丁目付近の浸水状況（9月26日）

【出典：国土交通省ウェブサイト】



昭和34年9月26日洪水

曳田川左岸堤と千代川合流ヶ所の破堤状況(17k800付近)

【出典：国土交通省ウェブサイト】